

❖
ごあいさつ

全相協50年を祝う

―法隆寺建築から学ぶ長持ちの理由―^{わけ}

公益社団法人 全国行政相談委員連合協議会会長

小野 勝久



今年度、公益社団法人全国行政相談委員連合協議会（以下全相協という。）は発足50年を迎えることになりました。

心からお慶びを申し上げます。この間の幾星霜は平坦な道のりではなく、山あり谷ありの連続でした。しかし、諸先輩はこの困難にも負けず果敢に挑戦し現在に至っています。諸先輩の御努力に敬意と感謝を申し上げます。存じます。

この度、この50年の歩みを「記念誌」にすべく検討した結果、冊子として一冊の保存版にするのではなく、年4回発行される「季刊行政相談」を特集号と位置づけ身近なところにおいて手に取り活用していただくことにしました。この5月号がその第1号になります。

行政相談委員の活動の拠り所となるよう編集し、次の世代の行政相談委員の参考にもなるような内容にすべく配慮しました。是非、行政相談委員全員の購読をお願いすると共に公益性の意味でも図書館や行政機関の待合室などに置かせていただき、広く国民の皆様にも目を通してもらうことにしたいものです。

ところで、50年という長い歴史を思うとき、私はまず奈良時代に建立された法隆寺を思い出します。その理由はいくつかありますが、特に日本に現存する最古の木造建築物であることにあります。「紙」と「木」で作られ、落雷や火にはひとたまりもない木造建築が、

1400年も風雪に耐えていることに驚きと日本建築の誇りを覚えるのです。

法隆寺金堂の大修理、薬師寺金堂、西塔などの復元を果たした最後の宮大工・棟梁と言われる西岡常一さんの著書「木に学べ」は、法隆寺を解体し、復元した体験から西岡さん自身が学んだもので説得力ある内容になっています。この本は、現在の私たちにも多くの示唆に富む内容、つまり、歴史を紡いで行くにはどうすればよいかのヒントがちりばめられているからです。

なぜ法隆寺は長持ちしているのか？ なぜ法隆寺は長持ちしているのか？ 材料にヒノキ（檜）を使ったからだと言っています。檜は飛鳥時代すでに大和の国には、樹齢の古い樹木がたくさん生い茂っていたようです。これは、聖

徳太子が斑鳩宮から岡本宮に行かれるとき、鹿がついてきたと記されていることから推察されます。鹿がいるということは檜があることを伺わせております。鹿は檜の芽が好物だからです。

日本書紀によると、スサノオ尊が自分の胸毛を撒いたら檜が生えたと云います。さらにこの樹木は瑞宮みずのみやに使えと定めていたので、神社の材料は檜となったのです。余談ですが、因みにスサノオ尊がひげを撒いたら杉が生え、眉毛を撒くと楠が生えたと云います。古代のロマンを知る面白い話です。

檜という木があったから法隆寺が今も残っている、檜という木がいかに優れた木であったか1400年前の人は既に知っていたとは驚きです。日本の建築物の一番の敵は湿気ですが、乾燥し過ぎず適度な湿度と気温が檜の生育にも良いし、保存にも適していたのでしょう。檜の北限は福島で南は台湾までと言われていますが、樹齢の古い檜は日本にはもう無いのが実態と言われています。

しかし、台湾のヒノキは日本の檜とは材質が違っているようです。檜は樹齢が長いとは言うものの、全て千年もつかというと、そうではなく、木の持っている性質を生かさなない場所で使われ

たらもたないと言います。そのためには、木を見る目が必要になります。木を殺さず木のクセや性質を生かして、それを組み合わせて初めて長生きするのです。口伝では、「堂塔の木組みは、寸法で組まず木のクセで組め」と云います。木のクセは、木の育った環境で決まり、そのクセを見抜くことです。木は正直で、右ねじれば、千年たつてもうそをつきません。動けないところで、自分なりに生き延びる方法を知って育ったからです。木のクセのことを木の心と言いますが、風を除けこちへねじろうとしているのが、神経はないけど心がある、ということでしょう。曲がった木を削って真っすぐに見せると何年もたたないうちに曲がってしまうことになります。木を知るには土や、切り時を知ることでも大切です。千年経った木は、千年以上の自然との競争に勝ったことであるし、50メートルの木は、50メートル下まで根が張っている証拠でもあるわけです。

法隆寺を建設した時代は今のようない電気工具有りません。斧、のみ、のこぎり、ヤリガンナなどを使って仕上げ、しかも狂いがなく出来上がっています。すべて人の手で、しかも工期も左官や屋根屋も協力して、今より早く

仕上がっています。薬師寺の例でみると、飛鳥時代に七堂伽藍や他の建物などを14年で完成させていたものを、道具が改良されたにも拘らず、現代では19年もかかっているのです。

さて、50年経過する全相協に目を転じて考えてみると、法隆寺建築から教えられることがいくつもあります。その土地の気候風土に根差したものは強いということ、日本文化に根差した我が国独自の制度と言われ、日本型オンブズマンとも言われる行政相談委員制度はまさに私たちが自信をもって良いことだと分かります。また、聖武天皇の時代、各地に国分寺をたくさん建てましたが現存するものはありません。なぜか？当時、大工は無理やり集められ、いやいや作ったからだと言います。時間を急ぎ、木の使い方も考えず、気持ちの入っていない建物を作った証でもあります。人財の宝庫と言われる行政相談委員が豊かな個性に基づいた組み合わせにより、奉仕の精神で五千人が心を合わせると良い制度に仕上がって行くというのも当然頷けます。国民と行政の懸け橋としての任務をただコツコツと愚直に努め、次の世代に紡いで行けたらと願っています。